

田村のつぶやき 第33号

2024.11.18 発行

文責：島根県立江津高等学校長 田村康雄

第九（だいく）

ベートーヴェンの「第九」（だいく）は、皆さんも一度は聞いたことがあると思います。日本では、年末になると各地で演奏会が開かれ、年末の風物詩となっています。今年も日本各地で演奏会が予定されています。「第九」の正式な曲名は、「交響曲第9番二短調作品 125」です。ベートーヴェン自身はタイトルをつけませんでした。第4楽章に、4人の独唱と混声合唱を取り入れたことから、通称として「合唱」や「合唱付き」が付されることも多く、日本では略称として「第九」と呼ばれています。ドイツの詩人シラーの「歓喜に寄す」から抜粋された詩に、ベートーヴェンが曲をつけたのが、いわゆる「歓喜の歌」として有名なフレーズです。この曲を作曲していた時、すでにベートーヴェンは聴力を失い、無明の闇にたとえられるような音のない世界に投げ込まれてしまいました。その苦難の中から高らかに歓喜の歌を歌い上げ「苦悩から歓喜へ」を永遠の音に表したのです。ベートーヴェンは、音楽の力をもって自らの人生の苦難を克服したのです。

以下、第九にまつわる豆知識を紹介します。

【その1】

それまでにない大規模な編成で（オーケストラ、独唱者、合唱隊をあわせると、ステージ上に百人以上の演奏者がいます）、演奏時間も約70分に及びます。ちなみに、初期のCD（高校生のみなさんにとっては、レコードどころかCDも死語になっているかも…）の記録時間が約74分に設定されたのは、「第九」が1枚のCDに収まるようにするためだったとか。

【その2】

1918（大正8）年6月1日に、徳島県板東町（現在の鳴門市）にあった板東俘虜収容所で、ドイツ兵捕虜により全曲演奏されたのが、日本における初演とされています。なぜ、ドイツ兵捕虜が日本に収容されていたのか、これは皆さんで調べてみてください。収容所には女性はいないので、独唱と合唱は全て男声用に編曲されました。日本での公式初演は、1924（大正13）年に東京音楽学校（現東京芸術大学）のメンバーがドイツ人教授の指揮によって演奏したものとされています。プロによる日本初演は新交響楽団（NHK交響楽団の前身）により1927（昭和2）年に行われました。

【その3】

1989年の「ベルリンの壁」崩壊直後の年末に、アメリカの指揮者レナード・バーンスタインが、東西ドイツとベルリンを分割した連合軍（米、英、仏、ソ）のメンバーによる混成オーケストラを指揮してベルリンで記念演奏を行いました。この際、第4楽章の詩の「Freude（歓喜）」をあえて「Freiheit（自由）」に替えて歌われました。ちなみに私は、この時のライブ録音のCDを持っています。

人類の歴史の中で、音楽をはじめとする様々な芸術が人間の心や生活を豊かにし、文化として継承され、人間を他の動物とは違う存在にしたのではないかと思います。